

「学芸部」と「白玲瓏」について

本校創立当初に設立された校友会には「学芸」「体育」「会計」の3つの部があり、「体育」には「野球」「庭球」「撃剣」「端艇」の4部が所属していたので、設立当初の部は「学芸」「野球」「庭球」「撃剣」「端艇」「会計」の6つでした。このうち「学芸部」が、いわゆる文化的な活動をする唯一の部で、その活動内容は「講演並ニ（ナラビニ）編纂ヲ為ス」と「校友会規則」に定められていました。「講演」については「もっぱら生徒の啓蒙啓発のため、各界の人士を招いて講演会を主催するのが、主な活動であって、生徒自身による弁論大会等は企画されなかったものようである。」と「八十年史」に記されていますが、明治42年10月に若き日の犬養毅氏の講演会を開催した記録が残っており、「五・一五事件の主人公、悲劇の宰相の若かりしころの演説に、聴衆ひとしく感銘をうけたことを伝えている」と「八十年史」に記されています。そして「編纂」にあたるのが校誌「白玲瓏」の発行でした。

「白玲瓏」第1号は、本荘中学初の卒業式の約2週間前、明治40年3月8日に発行されました。わずか52ページの冊子でしたが、生徒・教員による論説、随筆、和歌、俳句、小説等に加え、剣道・端艇の春季大会、秋季大会の記録といった盛りだくさんの内容でした。特に明治39年の端艇春季大会は秋田中学も招いて開催されたもので、対秋田中学の歴史的な第一戦（一秒差で本校の勝）の記録です。誌名はもちろん校章にちなんだものですが、名付け親は不明です。「白玲瓏」の位置づけについて「八十年史」「百年史」には次のように記されています。

「普通、こうした種類の、学校で発行する年刊雑誌は、生徒会機関誌であるものが多い。しかし「白玲瓏」は、その編輯発行が本荘中学校校友会であり、校友会学芸部、のちには校友会雑誌部が直接その衝にあたってはいるが、校友会そのものが、職員生徒、さらには校外員として同窓生をも含む組織であったから、学校全体の活動にかかわる雑誌、学校全般の学芸、文化、運動の集大成であり記録である雑誌、しかも校史たりうる雑誌、すなわち校誌という性格をもたされていた。」

「校誌」という位置づけは現在に到るまで引き継がれておりますが、「白玲瓏」第76号（平成10年3月2日発行）の「編集後記」に次のような記載がみられます。

「さて、職員による白玲瓏編集委員会の編集会議の際に、白玲瓏の位置づけは校誌なのか生徒会誌なのかという事が話題となった。他校では編集と発行を生徒会が行い、表紙に生徒会誌と明記されているものが多いのだが、本高では学校名しか書かれていない。これは、本校では、生徒会誌的な内容に、校誌的な毎年の記録や資料も加えて編集するために、職員で構成された白玲瓏編集委員会を編集の主体とする制度を取ってきたためである。つまり、白玲瓏は校誌とも生徒会誌とも言えないのが現状である。そこで改めて委員会から、校誌的な内容に配慮して編集すれば、今後生徒会誌として扱っても支障はなく、対外的にもわかりやすいのではないかという意見が出された。また、編集体制についても、現在の教員主体の編集委員会制度から、企画段階からもっと生徒会や生徒が参加して紙面づくりができる体制に移行したほうが良いのではないかという提案がなされ、こちらは次年度から段階的に見直す方向で大筋で了承された。」

第二次世界大戦末期から終戦後にかけて用紙事情が極めて悪く、10年余り発行できなかった時期はありましたが、現在に到るまで「白玲瓏」の歴史は続き、令和4年3月1日に記念すべき第100号が発行されました。

（文責：校長 熊澤耕生）